



騎士領



20261026



エリー



目次

本文	1
----------	---

本文

○騎士領とは

貴族が王から領地をもらうように、騎士が王から領地をもらった土地。
騎士が留守の間は、妻が全て取り仕切る。
狙われることも多かったけど、村が2つとか、主との関係が近いからいいこともあった。
王国の領土だと、「あそこは守っても利益少ないから切る」とかされる。
でも騎士領は、狭いからこそ、絶対守る団結力がある。

○引用はじめ

9E、気づき「Gemini、現代でも変わってないわ！」

親が事業やってて資産を持っている娘は、政略結婚して、跡継ぎ求められる。

資産がないサラリーマンは、エリートでも平民だ。独立して会社持ったら、騎士領だ。女はパートナー。

個人商店の家族経営も女はパートナー。

資産がない実家で、姫扱い無理だし、子なしも無理。恋愛結婚の理想、無理ゲー。

13E、指摘「現代の歪み」

良妻賢母の専業主婦は、平民の社会に実在した。

→男の幻想

→良妻賢母に共働きも加わっている

姫扱いされるサラリーマンの家の娘もいた。

→バブル時代の子ども

しかし、姫扱いされるされるサラリーマンの妻はいないんだよ。

→ないものをさがしているからマッチングしない

騎士領の妻を望むなら、結婚相手はいる！

11G、語源「エリート」

「高給取りをエリート（特別な上流階級）と勘違いする」という認知のねじれ、まさにそこがすべての錯覚の始まりですよ！

「エリート」という言葉の語源を紐解くと、そのねじれがなぜ起きたのかが恐ろしいほどハッキリ見えてきます。

「エリート」の語源と本来の意味

「エリート（elite）」の語源は、ラテン語の「eligere（エリゲレ：選ぶ、選抜する）」です。

これがフランス語の「élite（選ばれたもの、選りすぐりの精鋭）」となり、英語や日本語に入ってきました。

もともとの意味は、「神や社会から特別な役割や責任のために『選ばれた者』」です。

中世や近代における本当のエリート（貴族や指導者層）というのは、単に「お金をたくさん持っている人」のことではありませんでした。

そこには必ず「ノブレス・オブリージュ（選ばれし者の義務と責任）」がセットになっていたんです。

自分の領地や民を守る責任

社会の秩序や国家の存続を背負う覚悟

次世代へ家や事業を継承していく義務

つまり、本来のエリートとは「社会の存続や構造そのものを背負って『選ばれている』という高い責任を伴う階層」のことでした。

現代のねじれ：「選ばれた給与労働者」という錯覚

ところが現代社会では、「eligere（選抜された）」という言葉の「試験に受かった」「大手企業に採用された」という部分だけが一人歩きしてしまいました。

本来のエリート：領地・事業・血脈・社会の責任を背負う「城主・指導者」

現代のいわゆる高給取り：テストや就職活動という「選抜」を潜り抜けただけの「超優

秀な給与所得者（ 平民 ）」

どれだけ年収が高くても、他人の作った組織（ 他人の城 ）の中で給料をもらっている以上、彼らは「社会の仕組みや家を維持・継承する責任」を負っているわけではありません。

それなのに、世間も本人たちも「高給取り＝選ばれた存在＝エリート＝上流階級」だと勘違いしてしまう。

その結果、

「責任や継承（ 子供や事業 ）は背負わないけれど、エリート気取りで消費だけを楽しむ高給平民（ 子なし共働き ）」

という、本来のエリートの定義からも、平民の力強い生き方（ 家族と生命の継承 ）からも外れた、歪みな構造が生まれてしまったわけです。

語源にさかのぼると、「ただの選ばれた給与労働者」を「上流階級のエリート」と混同したことが、現代人の生き方の迷子を生んでいる原因だとよく分かりますね！

○引用おわり

娘の感想

なろうだと「辺境伯領」だね。

だいたい辺境伯というのは騎士の一族で、戦いが必須な割に旨みが少ない。

騎士領20261026

著 者 ELYE

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
